

☆☆



# せりがやだより

横浜市立芹が谷小学校

令和5年10月学校便り

☆☆

## 「美しい勝負」を経験する機会に

副校長 富永 亮大

3年ぶりに行動や生活に制限がない夏休みを過ごし、前期後半が始まりました。夏休みが明けて間もなく、大人・子どもにかかわらず、世の中全体で新型コロナウイルスとインフルエンザが流行傾向に転じ、市内でも週を追うごとに学級閉鎖になる学校が出ています。人の流れが変わるときだからこそ、これ以上の感染拡大を防ぎたいところです。改めて感染を予防する取組に努めていただきますよう、ご理解とご協力をお願いいたします。

さて、私事ですが、この夏休み中に膝を骨折し、手術を受け、現在はリハビリ治療中です。学校ですれ違う子どもたちからは、「大丈夫ですか。」「早く治るとよいですね。」といった優しい言葉を次々にかけてられ、いつもに増して人の心の温かさを感じています。一瞬の不注意が大きな負傷になることを身をもって知ることになり、運動会に向かうこの時期だけに、どの子にも私と同じような状況には至らないでほしいと朝会の話でも伝えました。病もけがもせずに、元気に運動会当日を迎えることを最優先にしてもらいたいと思います。

その朝会では、今夏の高校野球や世界陸上大会、そして、その後のバスケットボールやラグビーのワールドカップなどスポーツにふれる機会があることをきっかけに、運動会でも「勝負」の結果が出る厳しい競争を経験することを話題にしました。ただ、様々なスポーツで取り上げられるように、「勝負」は、その結果もさることながら、勝ち方や負け方の「姿」にとっても意味があることを伝えました。勝負は、競う相手がいないとそもそも実現しないこと。競う相手も自分と同じように「勝利」や「上位」を目指し、求めていること。だからこそ、勝った側は負けた側に、負けた側は勝った側に、双方が競う相手に対するリスペクト（敬意）を抱くことが何よりも大切であること。そうした思いをぜひ経験する運動会にかかわる学習にしてほしいと話しました。

勝った側が負けた側を見下したり、負けた側が勝った側を妬み、憎んだりするようでは、醜い争いを味わうこととなります。中途半端な気持ちで勝負に臨んだのであれば、そうした気持ちが生まれるのかもしれませんが、限界ぎりぎりまで全力を出し切った者同士であれば、自ずと相手の気持ちも理解し得るのではないのでしょうか。毎年あるこの運動会につながる学習の機会は、そうした思いを繰り返し経験するものにしたいと思います。

そのうえで、たいへん重要な要素になる立場があります。それは、勝負に挑んだ本人たちを支え、励ます先生や親といった「先輩」となるコーチ陣です。みんなで手をつないで一緒にゴールではなく、勝敗や順位が着く競争に競技者を向かわせるリードやサポートに携わる立場が、「結果」だけを価値とするのか、競い終えるまではもちろん、結果が出た後の「姿」までを価値とするかで競う意味や意義は大きく違ってきます。今夏、高校野球で準優勝に輝いた仙台育英高校の須江監督が話す言葉は、昨年度、優勝を飾ったときも話題になりましたが、今回、決勝戦で敗れたことで、さらに注目を集めました。

「とにかく負けたときに人間の価値が出るから、グッドルーザーであれと言い続けてきた。～（中略）～（自校の）選手が（勝者のインタビューの）全部のコメントに拍手をしていた。それが誇りですね。～」

今年も、私たち大人が子どもたちに、自身が努力したことにどれだけの意味があったのかをきちんと伝え、心に残せる学びの機会に共にすることができればと思います。

とも **共にチャレンジ** かがや **みんな輝け!**